

工学部学生諸君の

「工学部教育会議」への参加をよびかける

大阪市立大学工学部 助手・助講会

我々工学部助講・助手会一同は、我々の主体的な運動を通して大學改革をつらぬき、この大學荒廢の時点に立つて、教授会の手をまつことなく、教育本来の自主性に発したあり方をふまえて、我々の大學改革の一歩として、我々みずから手によつて、新しい教育研究活動の再生に向うことを決意した。それは単に教授会の肩代り的代行講義にとどまるものではない。我々の大学教育とは、教育を教師と学生相互の間の信頼関係の上に成り立つものであり、また恣意的な強権的管理が教育本来の姿に反すると考えるが故に、欺瞞にみちた当局に屈することなく、学生諸君と眞の連帯をかちとり、その上に立つて眞の教育の実現をめざそとするものである。研究と教育には、相互理解、批判、創造の三つの絶えざる活動が最も重要であり、しかも大学の全構成員によつて生かされてこそ、初めて学

問自身の批判性と創造性を保つことができる。このことは必然的に、教師、学生ともに對等の場における教育の確立、更には大學内外の権力管理機構に対する艶いの展開に連なるであろう。

こゝに、我々は、我々の手による自主的な教育研究活動の再生の一歩として、我々助手、助講層と学生諸君の対等の形において「工学部教育会議」の開催をよびかける。我々はこの場に、数ヶ月にわたる我々の討議の結果と、我々の教育に対する方針を提示し、学生諸君との卒直な意見交換を行うことによつて、改革への意志を結集し、それを我々の手で実行に移すことによつて、新しい市大工学部建設に立ちあがろうとしている。「工学部教育会議」は、その成功を踏み台として、我々の自主的教育活動を当局に認めさせ、そして、今後の工学部改革の、ひいては市大全体の改革の軸として、大きな意義を獲得することとなろう。

すべての工学部学生諸君の「工学部教育会議」への参加をよびかける！

われわれの運動は否定しがたい行動性の刻印がおされてゐる。われわれは講座制、教授の評議に不満を持ちつゝ、ともすれば研究至上主義にとらわれ、自ら講座制を担うものとしての存在を根柢的に疑うことなく存在して来た。

二月の教養三長官封鎖によつて斗争の渦中に投げ出されたわれわれは、当初教授会を批判告発する者として自らを位置づけたが、まさに学生により告発された者としての意識を十分持ち得なかつた。そのようなわれわれが、封鎖によつて「改革を」「全員成員の話し合える場の創出を」と叫んだのもごく自然のことであつたろう。すなわち、われわれが最初にとり組んだ「制度改革」は従来の講座制の下での我々の立場や、研究教育活動への不満などから思考されたものであるが、そこには本質的な問題の問い合わせ直し。。。このような目的意識や姿勢をもつて教育研究に参加するか。。。がなかつた。

我々はそのようにあいまいかつぎまん的でさえある状態にあつたが、四。一〇声明の教育研究に優先して改革に当ろうとした姿勢は語焉ではなく、今後も本質的に辯論すべきものである。

スキームを考え、スキームの中にもられるべき内容について検討していく過程で、われわれは提起されている問題の本質が、スキ

なあら、われわれが最初にとり組んだ「制度改革」は従来の講座制の下での我々の立場や、研究教育活動への不満などから思考されたものであるが、そこには本質的な問題の問い合わせ直し。。。このような目的意識や姿勢をもつて教育研究に参加するか。。。がなかつた。

六二〇統一行動は所期の成果こそあげえなかつたが、我々に市大問題について広い視野を与え、大学問題に取り組む広い層を彌り起し結集させる軸となつた。形こそ変つたが、二九会見に発展し、現在もなお当局の強硬的收拾に反対する中流の勢力として受けつがれている。

当時も工学部における運動の主体は工科協であり、その教授会会見等を通じ、我々は改革の相手となり得ない教授会の実態を知らされると同時に、我々は既存の既存ではなく、改革の主体であらねばならない立場を知らされた。このことは、いわれるまでもなく当然のことであつたが、実際に直接指摘されたことによつて、我々個人のかなりの部分が、その問題意識を明確に持ち、具体的に發展させることができた。このことは、いわれるまでもなく、八月上旬の連続総会等により改革への意欲をより強めたといえるだらう。

我々は改革の主体たるうとし、教授会を批判解体の対象とさえ考え方としたが、まだ協議会や教授会を正しい要求で突きあげて行けば

それが管理権能の姿勢を正すことが可能となるであろうとの期待を抱いていた。しかし学長選舉に際する我々の要望の態度、話し合い

ムそのものゝ中にあるのではなく、自己の從来の行動に対する批判に基いた、新たなる日常活動の創出こそがかなめであるとの考えに達した（六。三声明）。しかし、その時点では概念的な認識においての層としてのまとまりを得たに過ぎず、自からの何かを創り出して行こうとする精神的具体的内容に欠けていた。

前述の我々の中間者の立場は、一方では極めて客觀主義的部外者的大發想の源ともなつたが、同時に「管理者的發想」に毒されること少なく、比較的自由な目で大学問題にとりくむことを可能とするものであつた。

その頃、政府は東大でとつた行為を普遍化すべく、大学臨時措置法を国会に提出した。この法案は、本来独立であるべき教育研究の場への権力の介入を意図するものであり、さらに新しい大学を再生しようとする大学人の斗争を圧殺するものである。以上の判断から、我々は緊急の課題として、法輪化阻止の斗いに入つた。それはまず理院議、理助手会、工管会との共斗として始まり、陪生学生の行動力に支えられて、六二〇統一行動実行委員会として結晶化した。それは教員学生の差ばかりか、全共斗への反発をものり越えて詰し合ひ、批判し合い、共に大学改革に取り組んで行こうとする精神、す

による解決の最後の機会としての九、二九会見の拒絶は、大学協議会およびその下での教授会が大学および工学部の管理運営能力を失つたことの表明にしかほんならず、我々は改革を遂行するために自ら工学部の管理運営を担はねばならない立場に追い込まれた。言いかえれば、我々は協議会を批判し去ることにより、始めて單なる批判者から創造する者への転化、すなわち自立する可能性をつかんだ。自立とは社会的諸矛盾を直視し、その中へ主張的に参加して行くこととする姿勢であり、また我々の人間性回復を計らうとする斗いである。我々の自立は、我々の社会参加の形態である教育研究活動にいかなる問題意識をもつて、またどのような方法でたゞさわらうとするかを、自から問いかけて行く中で可能となつていくものである。この認識こそが、数ヶ月に及ぶ市大斗争の歴程にほんろうされる中で、やつとたどりついた点であり、その認識を具体化しつづけて行くことが、今後大学に止まろうとする我々の義務である。

しかしながら、この到達は当局の運動強導入により、いわば強制されたものであつて、その同じ運動強導入の下での收拾策により我々の自立の芽がつみ取られる危険に直面しており、我々は今後の發展を保証するためにも、準備不足のまゝ、あなたがも未熟児を生み落すように、暫定的な教育研究体制を早急に具体化せねばならぬ時点にある。

医学部問題は市大問題の中軸として存在し、制度改革、民主化斗争としての外見を取りつゝも、患者、青年医師、双方を収容せんと

する政府低医療政策に組みこまれた医局講座制、無給医問題、労働力修理工場とさえ呼ばれる病院のあり方等、医学部の持つ巨大な矛盾の爆発として展開していつた。医学部斗争は一時は全医学部を根底からゆるがす盛り上りを得たものゝ、現状に代る新たな医療体制等(医局講座制、差額ベット等低医療政策の克服を目指すもの)の創出を提起し、地域社会との連帯を獲得することが出来なかつた故に、マスコミ等による患者無視の運動との逆宣伝に破れ、思いもかけず身近に、しかも強力に存在した権力・教授会の斗争圧殺に屈すこととなつた。

こうに医学部教授会および協議会の大学からの逃亡と機動隊に支えられ、以前にも増した強力な権力となつての復帰について考えおく必要がある。医学部教授会の特色は背信行為の中にるのでなく、闘争病院等に根をはる医局講座制、それを通しての医業資本との結合、実にそれらを含めた低医療政策の中に、自から深く組みこまれている故に、医共斗の問題提起をある程度認めながらも、なおかつ、その圧殺者、低医療政策の戦斗的扱い手・権力の代弁者として復帰して来た所に見なければならない。

しかし、我々は前者の視点によつてしか医学部教授会をとらえることができず、機動隊進入へと続いた医学部教授会の背信行為に憤を覚え、総退陣を要求したが、上述の医斗争の弱点を指摘、克服できなかつた故に、一時は阻止し得たものゝ、医教授会の復帰を許すこととなつた。

協議会は医教授会の背信行為、病院経営に多少の疑惑を持ちながらも、それを批判できず、結局医教授会の背信、機動隊をつれての復帰を追認し、自からも医学部教授会と同様に機動隊に支えられてしか杉本キャンバスへ帰れないみじめな状態に落入つてしまつた。協議会がこのような行動を取つた一つの理由として、権威主義にとが権力の大学支配の中につゝまれてしまつてゐることであり、さらにはこのような状況にある場合には、臨時指置法の明白な形の介入にすら協議会は抵抗し得ないことである。このことは単に協議会の批判としてあるだけではなく、我々に對しても同じであり、大学自治の基本的認識を与えるものとしてある。大学問題の解決には市民労働者大衆との連帯が不可欠であり、この意味でたとえ組合の市大問題への取り組みに欠陥があつたにせよ、全共斗による組合本部のやみ討ち的封鎖を、我々はこゝで厳しく批判しておきたい。市民社会の連帯とは、單にともに政治課題を担うといった形にとどまつては不十分であり、教育研究活動の中に、我々の日常生活その中において直面する諸矛盾を意識的に反映させて行くことが必要であろう。このことは没主体的な「市民に奉仕する大学」を作るということではなく、我々からの日常生活とは無縁に、しばしばそれに相反してさえ教育研究活動を行つてきた我々が、人格の分裂を市民社会大衆の生活との連帯の方向で克服して行こうとすることがある。

このことは我々の行動を律してきた研究者集団、学会等の閉じられた社会での価値觀を、広く全社会的な視野の中で再構築して行こうとすることである。そのような認識が我々にこれまで不足していたことによつて、我々も教育不在、产学協同等と分ちがたく結びついている研究至上主義にとらえられていたのだが、そのような認識を持続させ具體化して行しことは、研究者が個別専門分野に分散され、ともすれば論文数によつて個人を評価しようとする風潮が広く存在している中にあつては、決して容易なことゝ考へてはならない。我々は研究至上主義を克服し、人間回復を基本方針にかゝげ、教育活動の充実した大学を作りあげて行く考へである。その目的を我々は個人の主体の確立とそれを支える組織活動の双方によつて達成して行きたいと思う。

教員と学生との関係が、教える者。。。教えられる者の関係に落するとき教育は学生に対する管理に転化し権力の大学支配を許す原因となることを我々は忘れるものではない。我々は教育を教員と学生の知的かく闘(自立した、ないしは自立をめざす主体の行為)としてとらえる。もとより我々は直ちにそれを実現できる状態にはない我々の弱さを言いつづらうものではない。

我々のさしあつての課題は、我々自からの自立の最低条件たる管理体系からの自立・教授会自治の打破、講座制、現行身分階級制の撤廃を実現し、眞の教育への第一歩をふみ出すことにあるといえよう。

(一九六九年十一月五日)